訳者略歴

宮本正清

1898年　高知県に生まれる
早稲田大学仏文学科卒業
著訳書　「ロマン・ロラン—その思想と芸術」
　　ロラン『コラ・ブルニョン』ほか.

山上千枝子

1933年　神戸市に生まれる.
大阪市立大学大学院修了.
京都女子大学講師

ロマン・ロラン全集 33　ローマの春　　(第27回配本)

昭和39年7月5日　第1刷発行　　¥ 1400

訳　者　宮本正清（みやもとまさきよ）
　　山上千枝子（やまかみちえこ）

発行者　東京都文京区春木町 1-22
　　北野民夫

印刷者　東京都新宿区改代町24
　　田中昭三

発行所　東京都文京区春木町 1-22　株式会社　みすず書房

理想社印刷・鈴木製本

ローマの春

（一八八九―一八九〇年の母への手紙）

宮本・山上訳

出版者の注

ロマン・ロランの注のすべてと、手紙のすべての日付けは、彼がこれらの手紙をよみ返し分類したとき、すなわち第一次世界大戦のあと、一九二〇年から一九二七年までのあいだに彼によって加えられた。

目次

ローマの春……3
この若いフランス人……マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク……5
ファルネーゼ宮へ帰る……297
序……ソフィーア・ベルトリーニ・グエリエーリ＝ゴンザーガ……299
訳者あとがき……600
人名索引……i

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この若いフランス人…

……私がモノーのところで知った彼の門人たちの中に、彼がとくべつに私に推薦した一人がありました。彼ははたしてエコール・ノルマルの卒業試験を見事に了えて、ローマでフランス考古学歴史学院で二年をすごすことになりました。各種の才能のうちでも、彼は音楽にたいしておどろくべき天分をそなえておりました。

……彼がローマに到着したときに、ふかい真摯な知性、もっとも洗練されたものへの趣味をそなえた一流の音楽家をロマン・ロランのうちに見いだして、私はよろこびとおどろきをおぼえました。そして彼は、たぐいもない親切から、そのあっぱれな才能を私のためにささげてくれました。幾時間となく、モーツァルト、バッハ、ベートーヴェンのアルモニーが私のところでふたたび響きわたるのを私はききました。そして私は、敬虔な沈黙の中で、かの偉大な魂たちとの結合をただひとりでたのしむのでした。彼らは、その形而上学的な言語によって、天上の事物を私に啓示し、純粋な歓喜の刹那を私にあたえました。

この青年のいっそう内面的な知識が私にとって快かったのはたんに音楽的見地からのみではありませんでした……国籍を異にする卓越した人々のなかに私がすでに見いだしたと同じ理想主義、同じ高遠な憧れ、すべての偉大な知的発顕にたいする同じふかい理解をこの若いフランス人のなかに私は見いだしたのでした。彼はトルストイを深く尊敬していました。すでに言ったように、彼はモーツァルト、バッハを、なかんずくベートーヴェンを愛していました。ワーグナーに熱中していました。ローマでは、彼はとりわけルネッサンスの傑作を観照していました。そして、南国(ミディ)の壮大な自然の影響のもとに、生存にふさわしい土地をみいだした花のように研究に花咲くのでありました。それは私が以前から確信していたこと、すなわち国籍や人種の相違は人間の魂本来の多様性とはまったくちがったものに基づくということのよき証明でありました。

ロマン・ロランがローマで過した二年のあいだ、私はもっともノーブルな知的関係を彼ともちました。そのことは、心情の一致のためには年齢の相違は少しも存在しないこと、たとい身体という覆いは老衰して、かりそめな万物の運命をうけるとしても、魂はその内部に永遠の青春の泉を所有

していて、それが魂を清新活潑に保つにちがいありません……彼の音楽的天分だけがこの若い友に私をひきつけたのではありませんが、彼はほとんどいつも沈黙していた私のピアノのうえに、音響の芸術のすべての巨匠たちの精神をよびさまして、久しく渇望していたよろこびをあたえるのでした。知的生活のあらゆる分野においても、彼はその本領を発揮するようにおもわれ、彼自身のいっそう完全な発展につねにあこがれていました。私は彼のそばに不断の刺戟をみいだしました。それは私のうちに若々しい思惟とすべて美しいもの、詩的なものへの強烈な関心をめざめさせました。この点、すなわち詩についていうなら、私はこの友の卓抜な天賦を徐々にみとめました、しかもそれは、彼の一つの劇詩をよむことによって、驚嘆しました。その作は、フランスにおいてじつに低下していた劇芸術の若返りが可能であるという希望をただちに私にあたえました。この芸術は、人間の本性に内在する模倣傾向にしたがって、他の諸国でもまたじつにみじめな方向をとっていました。

……史劇の第一の義務の一つは、それがおこなわれる時代をよく描き、よくそれをくっきりと浮び上らせ、いわば、その時代の空気を呼吸させ、人物が彼らにふさわしい環境のなかで活動するのを見せることであります。史劇に必要欠くべからざるこの義務が、私の若い友の一つの作品のなかに完全に尊重されているのを私は見いだしました。それは彼がルネッサンス時代の作品を通じてふかく研究したルネッサンスの直接影響のもとにローマで生まれたものでした。彼はその時代の精神にじつにふかく滲透されていましたし、その人物たちを通じて、時代の描写はじつによくそれを彼に啓示していましたので、人物たちが蘇って、彼の想像のなかに入りこみ、彼らがその時代においてなしたであろうように行動するかにおもわれるのでした。このように一つの創造的精神の進化発展のあとをま近くから追うほど興味ふかいことはありません。その精神は、外部の障碍に遭遇することなしに、彼の内面の声の専制的な命令に服従し、思惟のなかと実行のなかに澄明の勝利をもたらそうと戦い、また、彼の内心に誕生した世界を生み出すことによって、すべての芸術創造のもっとも高い、もっとも不変な法則を満足させようと努めるのでした。

……ある夜、ロランはベートーヴェンの偉大なヴァリアションを私のために弾きました。なんとよく彼の魂がそこに読みとられることでしょう！　彼はただ彼自身の内部に、不断のアルモニーのただなかにのみ生きていて、世界も形式も彼には無関係になります――……ある夜また私の友は私のまえでおどろくべき風に演奏しました。意志が沈黙をまもり、純粋な美の感情だけが魂をみたす瞬間はなんとい

う美しい瞬間でしょう！――……ある朝、ロランはミンゲッティ夫人のところで、彼女のもとめに応じて、パルシファルの抜萃をひきました。すると私にはそこにいた人々が完全に消え去り、私はただアルモニーのなかにのみ生きていました。そして世界の魂は音楽であることをまえにもましてかんじました。ワーグナーはそれを理解し、予感しました。パルシファルの中で、明らかに彼はそのヴィジョンをすでにいだいてさえいます。そうです、たしかに、私たちはそこに卓抜な魂たちの啓示をえます。

……ロランがローマにいたおかげで、音楽が私の魂のすべての憧れの上位に立つにいたったこの二年のあとで、私は初夏のころ、ボローニャ近くの、メッァラッテのドナ・ラウラ・ミンゲッティの魅力にとむ別荘へ行きました――……それから、ヴェネツィアへ数日行きました。そこへはヴァルスベルクの死以来行ったことがなかったのですが、そこでロランと会うはずになっていました。ロランはそれまでに、ウンブリアの旅をしてきました。そして私は彼といっしょにバイロイトに赴き老衰のために妨げられないうちにいまいちどそこに行ってパルシファルを聞きたいとねがっていたのでした。そこへはいちども行ったことのないロランは、イタリアで過したその美しい歳月の幕をこうして閉じ、壮年期の戸口で、そうした崇高な感銘をいわば一種の祝福として、彼の仕事の計画のために、彼の闘いと、ほとんど確かな失望とのために受けたいとねがっていました……

マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク
（「わが生涯の夕べ」）

最初のローマ旅行の最初の手紙、
汽車の中で書く。*

水曜日朝（八九年十一月六日）

いとしいかわいいママン

なんの出来事もなしに一夜をすごしました。ディジョンまでは私たちは三人でした。三人ともよい心掛けで、眠ることしか考えませんでした。悲しみにもかかわらず、少し眠りました。ちょうどいま、シャンベリーを通りすぎたところで、七時です。この便りをできればモデナで出しましょう。——私たちが通ったところはどこでもどしゃ降りで、大洪水でした。しかし今では、天気はよくなり、太陽があらわれそうです。

さあ、私のいとしい人たち、そんなにがっかりしないでください。もう一日がすぎました、そしていちばんいけない第一日が。あなた方の消息をできるだけたくさん私に知らせることを考えてください。私もそうします、できるかぎりたびたび。私のいとしいお母さん、あなたの可愛い子は、ローマでもパリと同じように、同じようにつよくあなたを愛していることを信じてください。

ミラノあてで手紙をください、局止めで（ferma in posta.）。午後にはトリノへつきますから、またお便りします。私に代って可愛いマドレーヌに接吻してください。あなたに千度も接吻します。あなたがたみんなに接吻します。

あなたを愛するあなたのロマン。

土曜日朝（八九年十一月九日）

私のいとしいかわいいママン

今日もまだミラノにいます。というとたぶん午後に、遠足——おきまりの——をパヴィーアの修道院（北イタリアのもっとも美しい装飾的作品だと言われています）へするかもしれません。——しかしミラノへ戻って泊ります。明朝、九時ころにフィレンツェへ向って出発し、ボローニャ

* ロランの注。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にも足をとめないで直行します。ラファエロの「聖女チェチーリア」を断念して、フィレンツェのフラ・アンジェリコをよく見ることにします。日曜日の午後四時ころにつくでしょう。電報をお送りするかもしれません。しかし、いずれにしても、それを受けとられるのはたぶん翌朝、月曜日になるでしょう。

ジョルダンが今日は良心的にミラノの案内をしてくれました。少し良心的すぎたのかもしれません。というのは彼はたいへん親切で、この青年は、邪魔にはならないのですが、彼がいるだけで、彼がいると感じるだけで、彼が案内してくれた芸術作品に心を傾けて没頭することを少し妨げます。

私はドゥオーモ（カテドラル）の見物とその上に登ることによって一日をはじめました。それはミラノ人によると「世界の八番目の驚異」です。（ミラノをご存じですか？数日滞在されましたか？　きっとそうだろうとおもいますが。）――このドゥオーモは白い大理石の巨大な聖遺物匣（シャス）で、その大理石を刻み、彫刻し、透し彫りを施し、円柱が林立し、無数の彫像があります。――全体はひじょうに冷たく、ひじょうに均斉がとれて、ひじょうに完全で、つまり凡庸です。これは見事な仕事です。そう言わざるをえませんが、しかしそれは仕事でしかありません。――私は頂上まで登りました。広々とした展望です。アルプスの連嶺が遠くにあります。しかしそれは旧い知りあいです。

その他の時間は（食事をのぞいては）美術館と教会ですごしました。美術館では、有名なラファエロの「聖母の結婚」をみました。それはもちろん私を感動させませんでした。というのは、私はペルジーノにたいして趣味をもたないからです。――すばらしいマンテーニャ（マドレーヌ、マンテーニャとは何ですか？　――答。ルーヴルの十字架のキリスト、跪いたマントーヴァ公――等々）。この縮小された、醜い、嫌悪の念をいだかせる、尊大なキリスト。悲痛な苦悩の顔と、上半身の上部と、足の裏しか見えません。近くからみると、奇怪な印象ですが、適当な距離からみると、感動をあたえます。マンテーニャはこの研究をひじょうに重んじ、つねにそれを守り、彼の腕の巧妙さの証拠としていました。私はまた、（マドレーヌ）、C・ベリーニの「慈愛（ピエタ）」（聖母が死したキリストを抱く像）をみました。ミュンツの叢書にのっているのです。（これは彩色によってあまり引き立ってはいません）――それに引きかえ、グリヴェッリの「聖母と聖者たち」（私のイタリア絵画の本にのせてある）は光彩を放っています。

この美術館の傑作は私にとってはダ・ヴィンチの簡単なパステルです。それは少し損傷（いたん）ではいますが、神々しい美

をもっています。それはキリストの顔で「最後の晩餐」のための習作（後に放棄した）です。こうしたタイプのキリストがどんなに稀れであり、深いものかとおもいます。それをふたたび取りあげた画家は誰もありません。伝統的なイエス、きちんと髭を梳ったイエスか、あるいはプリミティフ画家たちの苦行者イエスを墨守しました。しかしダ・ヴィンチのイエスはじつに立派です。髭のない、ほんのりとばら色をおびた、少し女性的な顔で、感じのいい卵形で、寂しい優雅な表情をしています。長い眼瞼を伏せ、ほのかな憂愁をおびた微笑をたたえ、そこには苦悩と諦めがみちています。なんとも名状しがたい愛情と惻隠の魅力です。

ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」も訪れました。――そこの入口は不愉快です。硝子戸、回転木戸、人を引きつけない店で、市場のバラックと言うところです。――「最後の晩餐」の第一印象はみじめでした。――よく見えなかったのです！　壁画の破損、損害に打たれただけでした……私にとってもっとも尊い芸術家たちの一人のもっとも偉大な作を享受することができないのかと心におもい不安でした。見ることさえできないだろうか？　――それから徐々に（私は一時間いました）、この偉大な光景が私の心の中にふたたび創り出されました。私の眼は弱くなった色彩に慣れ、私の魂はうすれた線の下に魂たちをふたたび見いだしました。そして画面全体が私の心のうちに蘇えりました。――私は強調しません。じつに美しいものです！　そしてそれが美しいことは誰でも知っています！――しかしとりわけ、それは全体としてじつに単純で、細部においてじつに深いものです。私はただ一つしか非難する点が見つかりません。おのおのの人物の生命がじつに個性的で、その身振り、その態度がじつに明確で瞬間的なので、この創造を支配した思想を正確にみいだすことは必ずしも容易ではありません。しかしダ・ヴィンチの欠点であると同時に最高の長所でもあります。そして、たとえば彼の「ジョコンダ」の人を当惑させるような表情もそこからくるのです。ダ・ヴィンチはじつに広大でじつに深い天才ですから、完全に彼を味わうためには――ほとんど――彼と同じくらい偉大でなければならないでしょう。――立派な凡人たち（たとえばわがフランスの大多数）とはちがった存在であるすべての天才と同様に――ダ・ヴィンチはほかの人々よりも多く生き、考え、感じたのですから、ほかの人々には――それを感じたことのない人々には――理解できない感情と思想を彼の絵画にしばしば語っております。――それは一般法則だということすらできます。――万人から理解された天才、それはじつにおどろくべき例外でしょうが、はたし

てそれがあるでしょうか？

いっこうおもしろくないことをお書きします。しかし私が芸術について語るときには、私はもはや尺度を守ることができません、自分一人のためのように喋りに喋ります。

それだからといって私の悲しみが消えてしまったというわけではありません。私を愛するいとしい方々、安心してください、私の悲しみはまた始まります、いまは気がまぎれています。しかし尊い芸術家たちの幸いな欺瞞がなくなったときには――私は自分の心がひじょうに痛むのをおぼえます――そしてとりわけあなたの心がさらにいっそう痛むのをおもうと。

……ひじょうに活気のある都会です。四頭だての馬車が、パリで二頭だての馬車のように普通です。私は昨日馬車の御者台に赤い制服をきた従僕を見かけました。それは王家の制服だとききました。今まで私が見た宮廷のことというのはそれだけです。しかし、宮廷はモンツァで、すぐ近くです。

いとしい両親、いとしいママ、心からあなた方に接吻します。

あなた方を愛するあなた方のロマン。

私のいとしいお母さん、あなたの（水曜日の）よいお手紙を、郵便局で、シュアレスの手紙といっしょに見つけました。フィレンツェあてにお手紙ください。

日曜日の朝投函*

土曜日夜（八九年十一月九日）

いとしいママン、やさしい、いとしいかわいいママン。――私があらゆる用心をしているのに、どうして心配なさるのです！　ではいったいどうすればいいんです？　あなたの電報はどうしたことなのかいまだに不審です？　今朝、郵便局へよりましたが、電報はなくて、あなたのお手紙を一通みつけました。それを受けとり、それをもって、心配もなしに、あなたが心配していられようなどとは想像もしないで、静かに一日をすごしました。ミラノの見物を完了しました。午後にはパヴィーアへ遠足をしました。もどってみると、ジューバンが今夕ホテルへついていましたので、ジョルダンといっしょに夕食をとりました。それから夕食後、彼に局止め郵便を教えるために彼とそこいらを一巡り

* ロランの注。

しましたので、思いついて私あてに何もきていないかと尋ねましたが、期待はしていなかったのです。今朝の十時にうったあなたの電報をみつけたのです。すぐ電報局へかけつけたのですが、もう九時でしたから、あなたは私の電報を明日にしか受けとられません。——途中で盗まれなければです。——でもいったい何があったのです？　私があなたにお送りした手紙と電報は正確に次のとおりです。

水曜日の朝。モデナから手紙一通。
同日午後二時半。トリノから電報一通。
木曜日午後。ミラノから電報一通。
金曜日朝。ミラノから手紙一通。
土曜日朝。ミラノから手紙一通。
同日午後。ミラノから電報一通。

よく配置されていましょう？　——私の手紙のどれかが紛失したでしょうか？　それとも今朝私からの電報を待っておられましたか？　しかしミラノを離れないのですから、それは無用だとおもったのでした。いったいどんなことが私に起るとお考えですか？　ここはパリよりも安全な、ひじょうに安全な都会です、そしてそのうえ一人の友人が私から二歩のところにいて、この二日以来少しも私を離れていないのですよ。——なんでしたら、毎日電報をお送りしますよ。しかし——ある種のぜいたくな電報や、大使館の電報以外には——電信を用いるのは旅行の日だけにすべきだと私は思ったのです。——とにかく、どういう話し合いにしたいかおっしゃってください。フィレンツェへ手紙をください。あなたがどうなったかわからないままに、明朝出発するのはこまります。——それから、私から受けとるすべてのものの月日と時刻とを、お手紙ごとにかいてください。ジョルダンが言うには、イタリアからの手紙は五通のうちには、着かないのがきっと一通はあるとのことです。それはひどく腹立たしいのですが、どう考えたらよいか知っておく必要があります。それなら大切な手紙は書留めにするでしょう。——電報のことは、昨日申したとおりです。

あなたは自分でなさることがおわかりでしょう。私は一日の印象をあなたにくわしくお話しする余裕も気持もありません。

まず第一に——あなたはモノー氏の手紙を私に送られました。私がこれからすることに私自身よりも多く気をつかわれるこの親切な人は、私に学位論文のテーマを提供され——私にとって不愉快でない、またあなたにとってもそうでないことを言われます。私が彼のところで会った、ワーグナーの友達で、そして私にたいへん親切な態度を示され

た老婦人が十一月末にローマへ帰られます。彼は彼女の住所を私に知らせ、彼女は私に会うことをひじょうに喜ばれるだろうし、私がときどき彼女を訪問してくれるとありがたい、彼女はかなり孤独にくらしているからと言っておられます。よろこんでそうします。立派な方で、興味のある人だとおもいます、そのうえ、ピアノですから。

ミラノの主要な美術コレクションは見終りました。ペッツォリ美術館では、私のいとしいボッティチェリにたいする熱烈な愛情をささげました——そしてアンブロージョ図書館では、アルベルト・デューラーの一連の版画が熱病的な賞讃をもって私を満たしました。デューラーを愛するためにイタリアへ出かけるというのは少し場ちがいです。しかし、ミラノが彼の作品の貴重なコレクションを有するとすれば仕方がないでしょう。まったく稀れな力強さとともに、じつに深い微妙な完成をもったそれらの傑作に比べうる版画はありません。レンブラントの魔術（私は彼の作「ラザロの復活」をみましたが）が辛うじて比肩しうるものです。偉大なマンテーニャも及びません（私の「版画史」をごらんください）。

午後一時半に、ミラノの肝腎なものを見ましたので、気動車にのってパヴィーアへつきました。私はそこへくだらない戦争の武士道上の思い出のために行くつもりはなかったのでした（どうか信じてください。そんなことは私の関心からはじつにかけ離れたことです。それはつまりフランソワ一世と彼の劍客たちのことですが）。そうではなく、ルネッサンスの偉大な作品の一つである修道院を見たかったのです。——あの時代の建築のすべての美しい実例と同じように、それは冷たい感嘆を私にあたえました。それは一つの傑作です。ミラノのドゥオーモもまた一つの傑作に近いものです。——私はゴシックのカテドラルが好きです。修道院（シャルトゥーズ）が建築家アンブロージョ・ボルゴニョーネ——の才能にたいする尊敬の念を私にあたえたにすぎないのに反し、それは、彼の画家としての才能にたいするきわめて高い敬意を私にあたえました。この修道院においてはほとんどすべてが彼の作です。彼自身が必ずしもそれを実現しなかったにしても、少なくともそれを彼が考えたのです。彼は壁面と穹窿いちめんに壁画をかき、板張りの部分の彫刻のデッサン等々をかきました。修道院自体を職人たちはすばらしい作とみるでしょうが——内部の絵画は私が見たもっとも美しいものです。ボルゴニョーネは二つのすばらしい長所、全体の装飾的な力と肖像にたいする穏和な力とをもっています。——ルーヴル、イタリアの他の諸美術館にもボルゴニョーネのひじょうによい作品がありますが、この修道院だけで彼の価値が正しく理解できます。——ミラノへ

七時ころに戻りましたが、その汽車を待っているあいだに、パヴィーアの郊外、ロンバルディアの涯しない平野、灌漑用の小さい水路がいくつもあって、その澄んだ水が柳の並木のあいだを四方に流れているあたりをさまよいました。大気はひじょうに和やかで、パリでよく見られるうす青い空でした。

この清らかな空気が明日も保ってほしいものです、フィレンツェへつく少し前に、汽車でアペニン山脈を越える場合に。もしも明日雨なら、翌日天気が回復するまでボローニャで待っていたいくらいです。――それに、月曜日に、この手紙と同時に、ボローニャとフィレンツェとどちらに行くかをお知らせする電報をたぶん受けとられるでしょう。私の到着の時刻が遅れるとか、電報局が少し遠いとか、盗難等々不時のことで、もしも電報がおくれたら、おゆるしください。しかしそんなふうに心配なさらないでください。――いつでもいちばん早くつくのは悪いニュースです。

心からあなたに接吻します。

あなたを愛するあなたのロマン。

あなた方一同にやさしく接吻します。――フィレンツェまでまいります。

フィレンツェ、火曜日朝(八九年十一月十二日)

いとしいかわいいママン

私はあいかわらずひじょうに元気です、出発のときよりもかえってよいくらいです。ひじょうにお腹がすいて、その空腹を十分にみたします(つまり食事をしているという意味です)。一瞬も無駄にはしません。昨日の朝八時に私の家(カーサ)を出て、帰ったのは晩の八時でした。

私はフィレンツェに夢中です。パリが恥かしくなります。もちろん、七階建ての新築の家屋、アスファルトの歩道、木煉瓦を敷きつめた街路ではありません。しかしそんなものは私にはどうでもいいのです、そんな贅沢な安楽とか、そんなはでな卑俗さなんかは。それとは反対に、シニョリアの広場とか、ドゥオーモの広場などを、重い舗石の街路をよこぎるとき、私の心はよろこびに踊り上ります。ギルランダーヨが壁画をかき、ドナテッロやミケランジェロが彫刻し、ブルネレスキが建て、フィニグエラが木彫をほどこし、ギベルティが金銀細工をしたカテドラルがどこに見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com